

松浦武四郎とは・・・「道を歩き、道をつくる」

江戸時代、伊勢の国一志郡(現在の松阪市)からはるか北方をめざした男がいた。
幕末から明治維新に活躍した松浦武四郎は、生涯にわたり全国を歩き続ける。

旅行家・探検家、作家、出版者、学者・・・

たぐいまれなる知識欲と冒険心で、多芸多才ぶりを発揮したが、
数々の業績の中で人びとの記憶に刻み込まれているのは、
「北海道の名付け親」であること。

さまざまな価値観を受け入れる広い心、偏見を持たない眼、常に先を切り拓く力・・・
ひとりの歩みが大きな足跡となって、2018年(平成30年)に生誕から200年を迎える。



16歳～27歳 諸国を遊歴

全国から伊勢神宮に参拝に来る旅人に刺激を受け、旅にあこがれる。
16歳で江戸へ一人旅をした後、全国各地を旅し、名所旧跡を訪ね、名山へと登る。
仏教に関心を抱き、九州から中国・インドを目指したが、鎖国のため断念。
長崎でロシア南下の危機を知り、蝦夷地(現在の北海道)を目指すことを決意。

28歳～41歳 蝦夷地の探査

28歳で初めて蝦夷地を探査し、以後6度に及ぶ詳細な調査を、アイヌの人びとの協力を得て行う。
その成果である調査記録は151冊にのぼり、吉田松陰をはじめ多くの志士たちと交わる。また紀行本や
地図を出版し、蝦夷地の様子や、アイヌ文化の素晴らしさを伝えることにも努めた。

51歳～53歳 明治政府への登用

明治維新に大久保利通の推挙により政府に登用され、開拓使で開拓判官を務める。
北海道の道名、国名、郡名をアイヌ語の地名を基に選定し、政府に上申。
アイヌ語の「カイ」(=この土地で生まれた者)を用い、「北のアイヌ民族が暮らす大地」
という思いを込めて「北加伊道」を提案したことから、現在の「北海道」の名が生まれた。



54歳～71歳 趣味に生きた晩年

晩年の武四郎は、各地を歩き、古物の収集に力を注ぐとともに、天神信仰に篤かった。
68歳から70歳にかけて、三重と奈良の県境にそびえる大台ヶ原へと登り、70歳で富士
山に登っている。
また、全国から贈られた古材で組み立てた畳一畳の書斎(国際基督教大学に現存)を
作り、71歳で旅に生きた生涯を閉じた。



松浦武四郎略年譜	年	事
	1818年	現在の三重県松阪市で松浦時春(桂介)の第四子として誕生
	1833年(16歳)	江戸へ家出の一人旅
	1834年(17歳)	全国を巡る旅に出る(19歳で四国、20歳から九州を巡る)
	1843年(26歳)	ロシアの蝦夷地への勢力拡大の危機を知り、蝦夷地探査を決意
	1844年(27歳)	青森から蝦夷地を目指す、松前藩の取り締まりが厳しく断念
	1845年(28歳)	第1回蝦夷地探査、太平洋岸を探査
	1846年(29歳)	第2回蝦夷地探査、日本海岸、樺太南部、オホーツク海岸を探査
	1849年(32歳)	第3回蝦夷地探査、国後島、択捉島などを探査
	1853年(36歳)	吉田松陰ら志士たちと海防問題について語り合う
	1854年(37歳)	宇和島藩の依頼で下田にてペリー一行の様子を調査
	1855年(38歳)	幕府から「蝦夷地御用御雇入」の命を受ける
	1856年(39歳)	第4回蝦夷地探査、蝦夷地の全ての海岸線と樺太南部を探査
	1857年(40歳)	第5回蝦夷地探査、石狩川・天塩川の流域を探査
	1858年(41歳)	第6回蝦夷地探査、十勝越えを達成、道東や日高地方を探査
	1868年(51歳)	大久保利通の推挙で明治政府から「箱館府判事」に任じられる
	1869年(52歳)	6月、政府から「蝦夷開拓御用掛」に任じられる 7月17日、「蝦夷地」に代わる名称として「北加伊道」などを含む 6案を提案 道名のほかにも、郡名、国名の選定に携わる 8月、開拓判官に任じられ、従五位に叙せられる 8月15日、太政官布告により「蝦夷地」が「北海道」に改称される
	1870年(53歳)	開拓判官を辞職、従五位も返上する
	1885年(68歳)	三重と奈良の県境にある大台ヶ原に登る(～70歳まで3回)
	1886年(69歳)	二回目の大台登山、畳一畳の書斎が完成(国際基督教大学に現存)
	1887年(70歳)	三回目の大台登山、富士山へも登る
	1888年(71歳)	再び従五位に叙せられ、2月10日に東京・神田の自宅で亡くなる

※年齢は数え年



松浦武四郎生誕200年記念事業実行委員会

〒515-2109 三重県松阪市小野江町383(松浦武四郎記念館内)
TEL 0598-56-6847(休館日を除く9時～17時) E-mail takeshirou@city.matsusaka.mie.jp